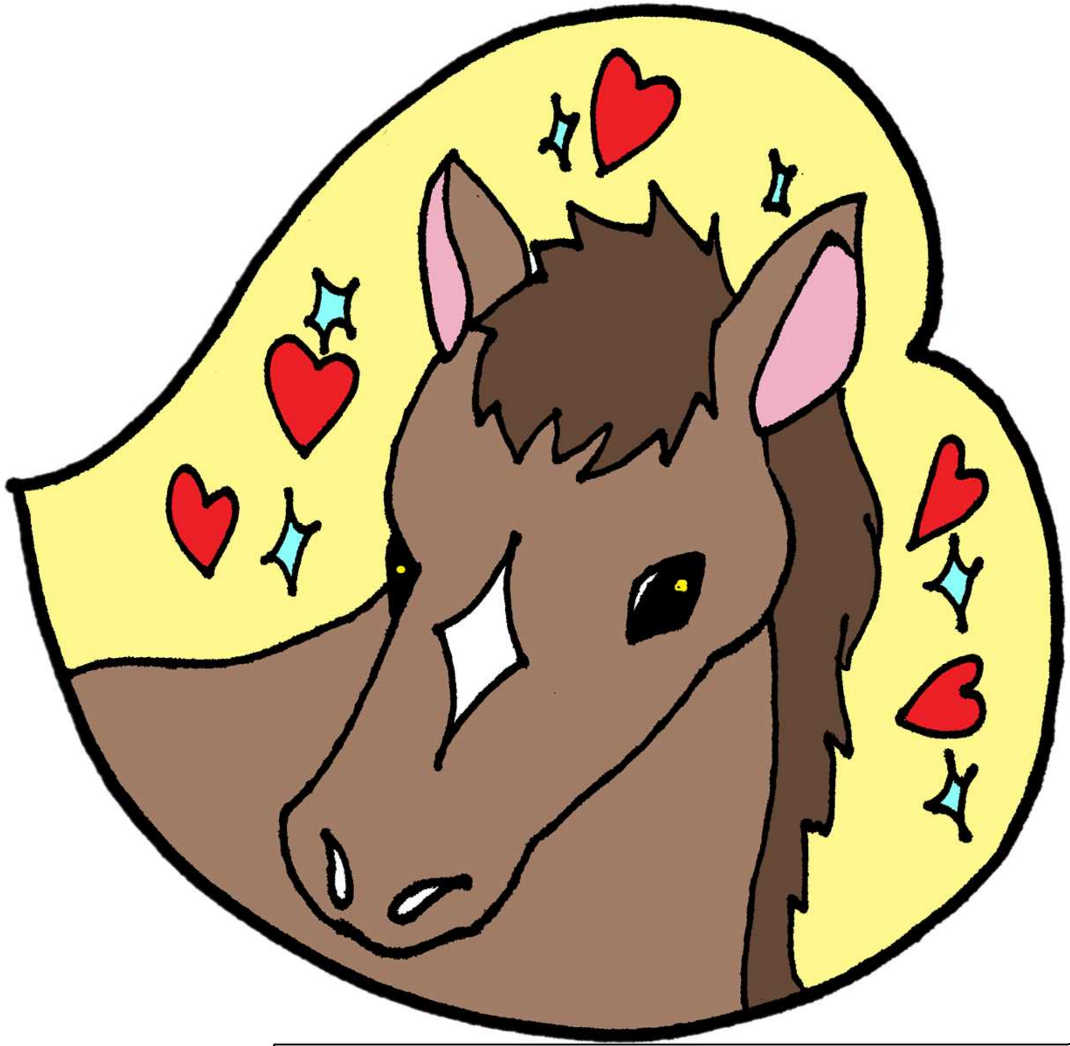
つがるの昔っこ（昔話）２５

名馬の恋
（津軽弁）



国土交通省　東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ　ゆな
カラーリング：みやかわ　みなみ

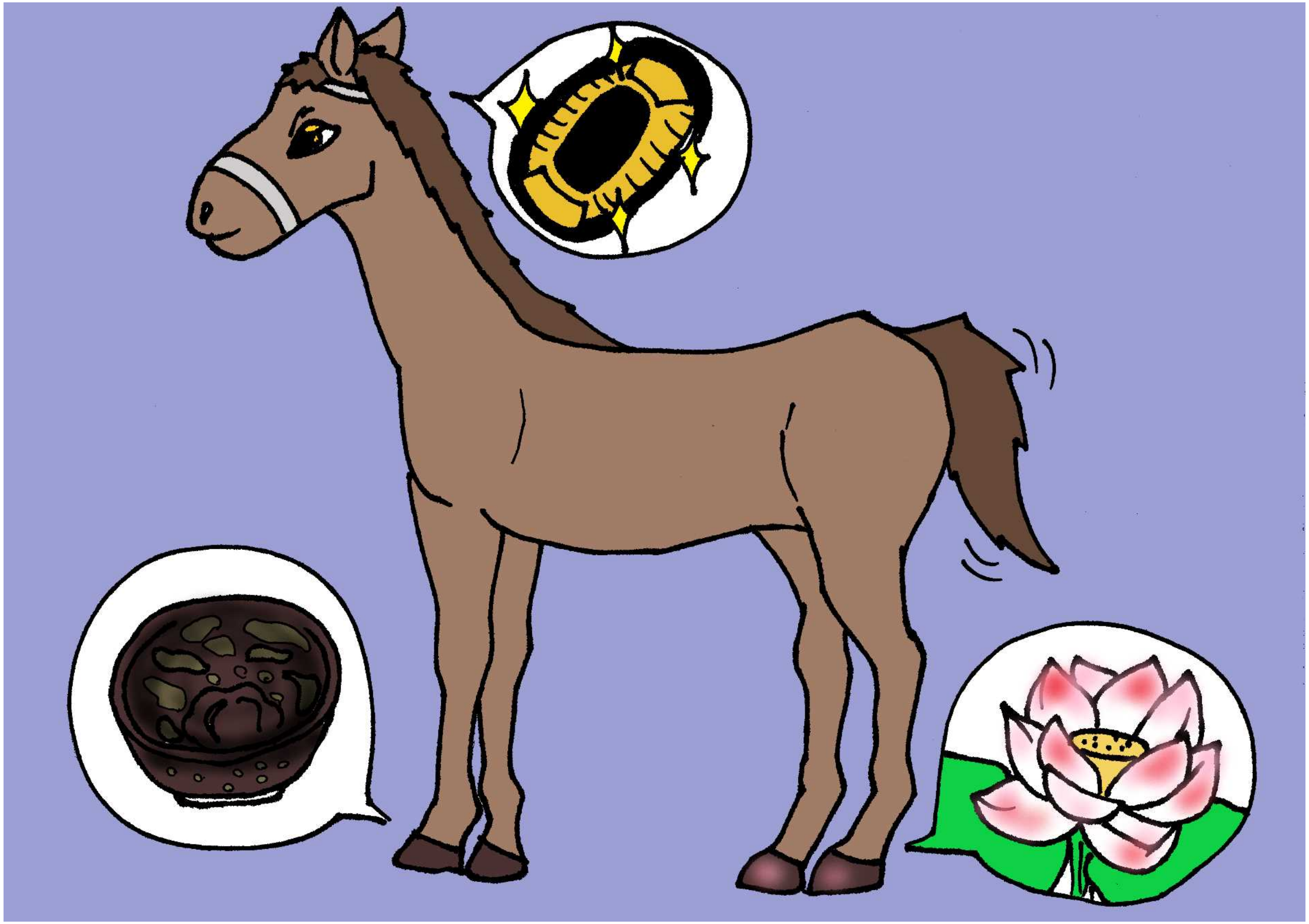
昔、ある村さ左衛門ず人居であたど。
金持（おおやげ）で、広い屋敷さ、使用人何人も居でくらしてらんだど。
馬コさ乗るの好ぎで、名馬ば飼（た）ででいだど。
かちゃもいいおなごで、夫婦仲良ぐむつまじぐ暮らしていだばて、たった一つ、淋しいごとに子供ねえんだど。

二人して相談して、馬頭観音様さ『何とか、子供ば授げでください』って、三、七、二一日の願かけしたきゃ、ほれー、そうしてるうぢに、わらしこ出来だど。

生まれでみだきゃ、これが女（おなご）わらしこでよ。んにゃんにゃ、なもかも
めごいわらしこであたど。左衛門どかっちゃ、なもかも喜んでキヌ子て名付けで、
大事に大事に育てたずおんな。
キヌ子が十五の時、馬喰う（ばくろう）来て、一頭の二歳の仔馬コめへだど。

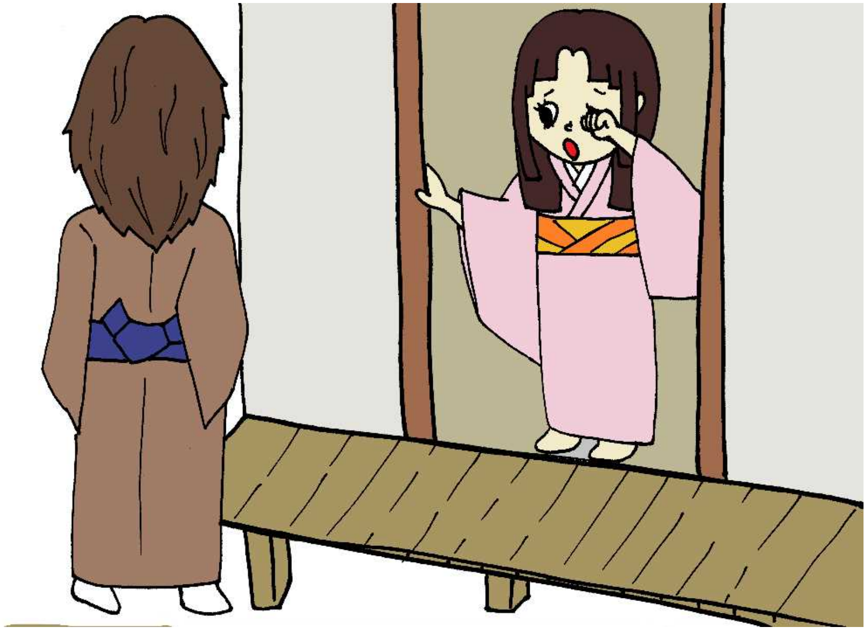
左衛門もキヌ子も、ひと目見で、この馬コ気に入って、大金ば払って買ったど。
思ったとおり、これが何もかもいい馬コでせ、せんだん栗毛て呼ばれで、これほどいい体の馬、この世にあるべがど思うような立派な馬であったど。

前足の踏み台見れば、天目茶碗とば伏せたたみたいで、後ろ足の踏み台見れば蓮華の花コだけんた。目（まなぐ）付ぎぁ大判だけんたに光ってるんだどせぇ

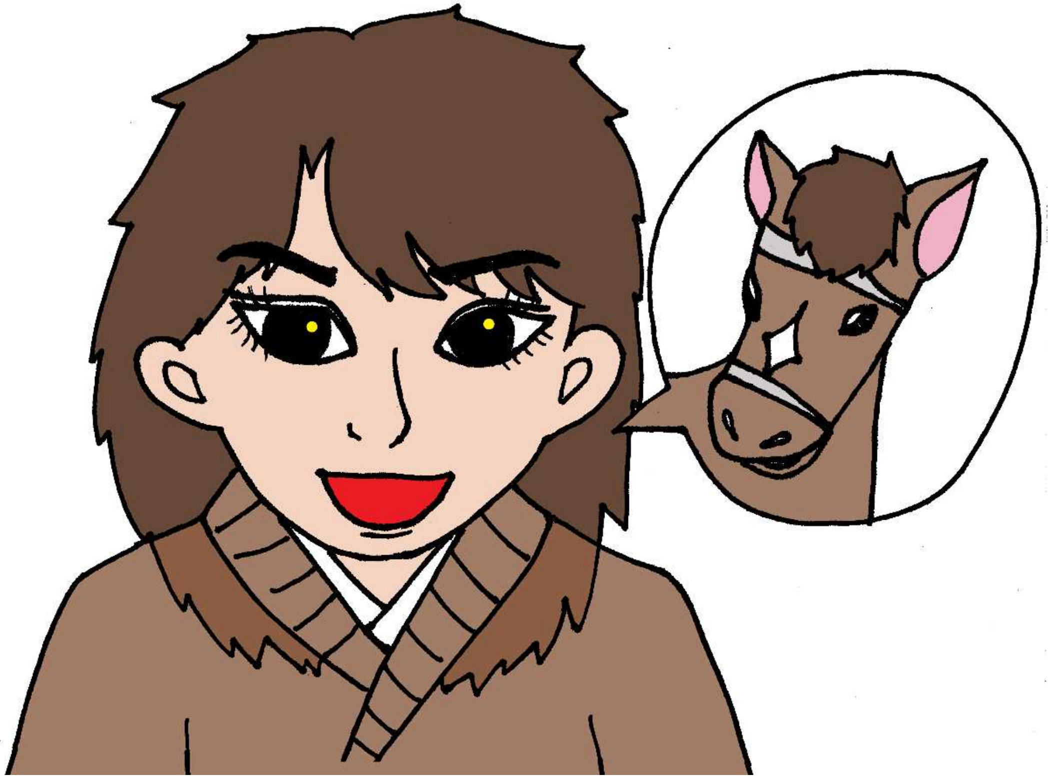


キヌ子、十六になって、せんだん栗毛ぁ三歳の駒コになったど。
金持（おおやげ）だどごで、ろぉ、金蒔絵の鞍さ、銀の轡（くつわ）、綾染めの手綱（たづな）つけで、キヌ子ごと乗へだど。
キヌ子嬉しくて嬉しくて有頂天になて『どごさ行っても
、おえの家のせんだん栗毛みてえだ馬コだきゃねえ。これ、もし馬コでねで、人間だば、おらの婿にしてえくらいのもんだ。なぁ、せんだん、お前、私の婿になるべ？』てしたど。

それがらせんだん栗毛とば厩（うまや）さ入れで、キヌ子、自分の部屋さ行ったんだどさ。



夜中になったきゃ、部屋の外の庭でトコトコず足音して、雨戸の外がら『キヌ子、キヌ子』て呼ぶ声したどごで、キヌ子ぁ目さまして、こったら夜中に、誰、私ごと呼ばてらんだべと思って、起ぎで雨戸ば開げでみだど。
したきゃ、庭の中さ一人の立派だ若者立ってあたど。
面長で髪の毛ぁふさふさして、大きぐ優しい目（まなぐ）でせ、姿形もなもかもいくて、いい男であったずおんな。

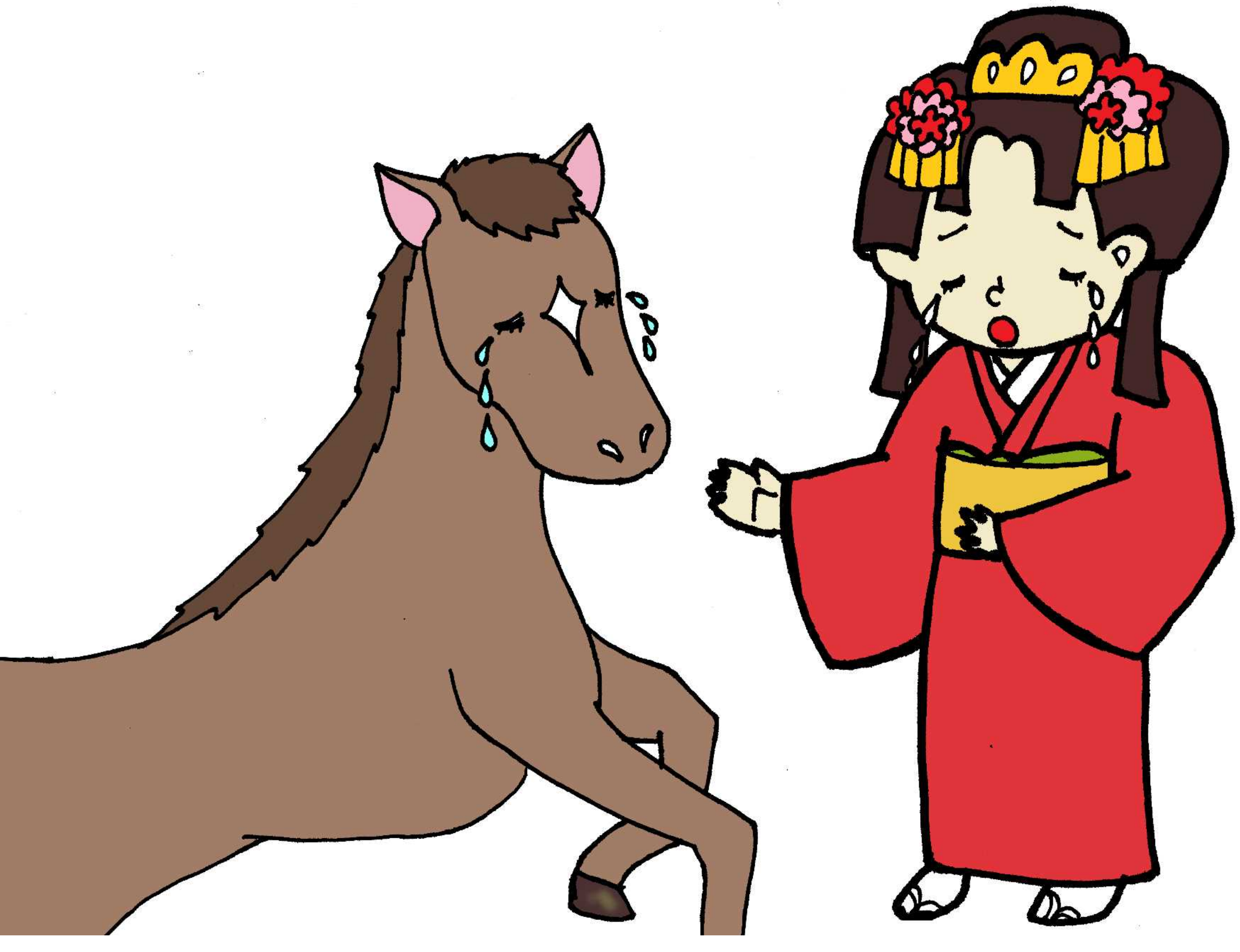


その若者、燃えるんた瞳で、キヌ子とばじっと見つめてあたばて、やがて一言『我、せんだん栗毛だね』て言て、庭ば横切って厩の方さ行って、スッと消えだど。

次の日がらせんだん栗毛ぁ病気になって、何も物食わねぐなったど。
左衛門もかっちゃも使用人達も、なんもかも苦して、笹だの芒（すすき）だの、葛の葉だの
取ってきてやったばて、何も食わねど。
キヌ子がそばさ行って鼻コばなでで、首ば抱いで、人参の葉コやったきゃ、わんつか食たど。
それがら三日、五日、七日もくらしたきゃ、せんだん栗毛ぁ、ゲロッっと痩へでまたど。

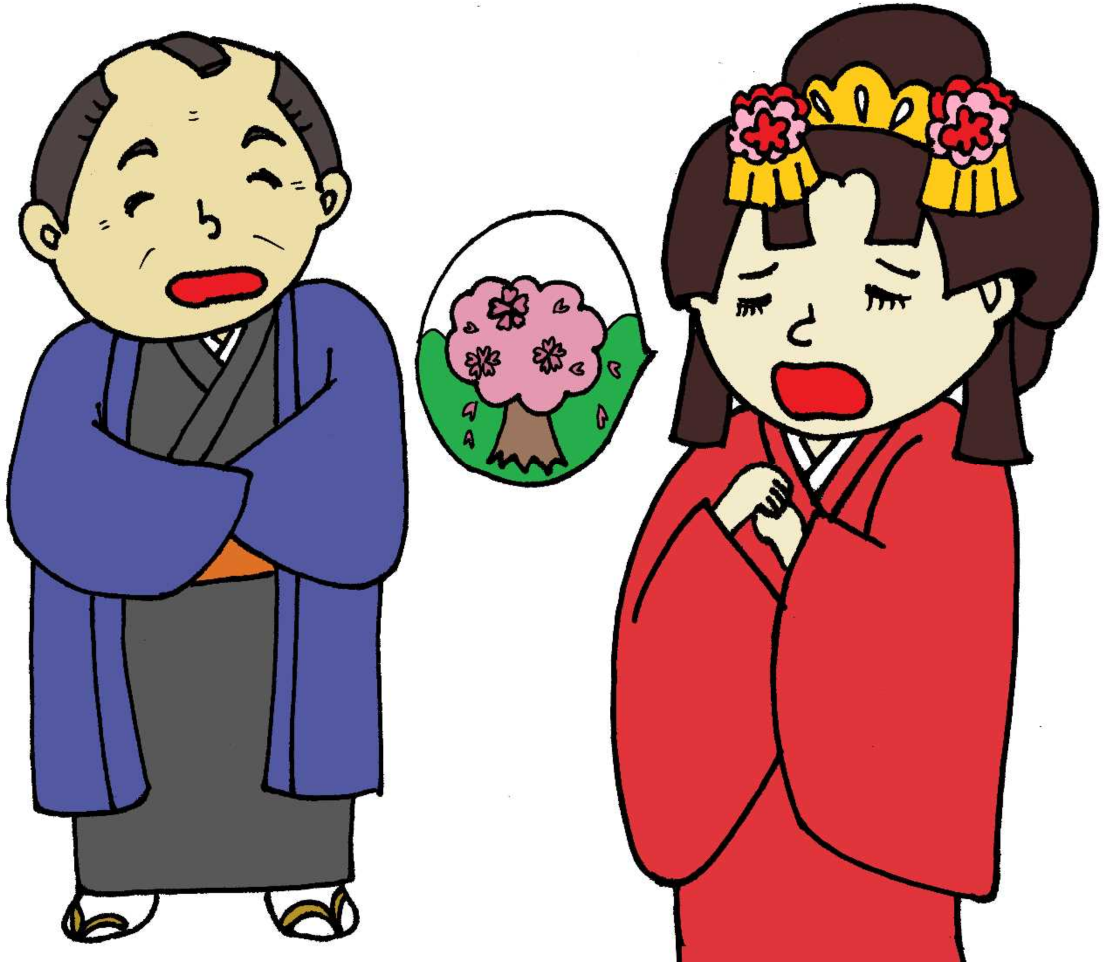
八日目の晩、キヌ子ぁなかなが寝つかれねで夜中に起ぎで厩さ行ってみだきゃ、せんだん栗毛ぁ前膝立でで、首ばキヌ子の方さのばしてよごして、ぼろぼろど涙コ流して、鼻づらコでキヌ子の顔（つら）コば撫でだど。
それ見で、キヌ子も思わず涙ポロポロこぼしたど。

次の日の朝間、せんだん栗毛ぁ、死んだど。



左衛門もあぎらめで、使用人さ『せんだんとば山奥さ埋めで来い』てしたど。

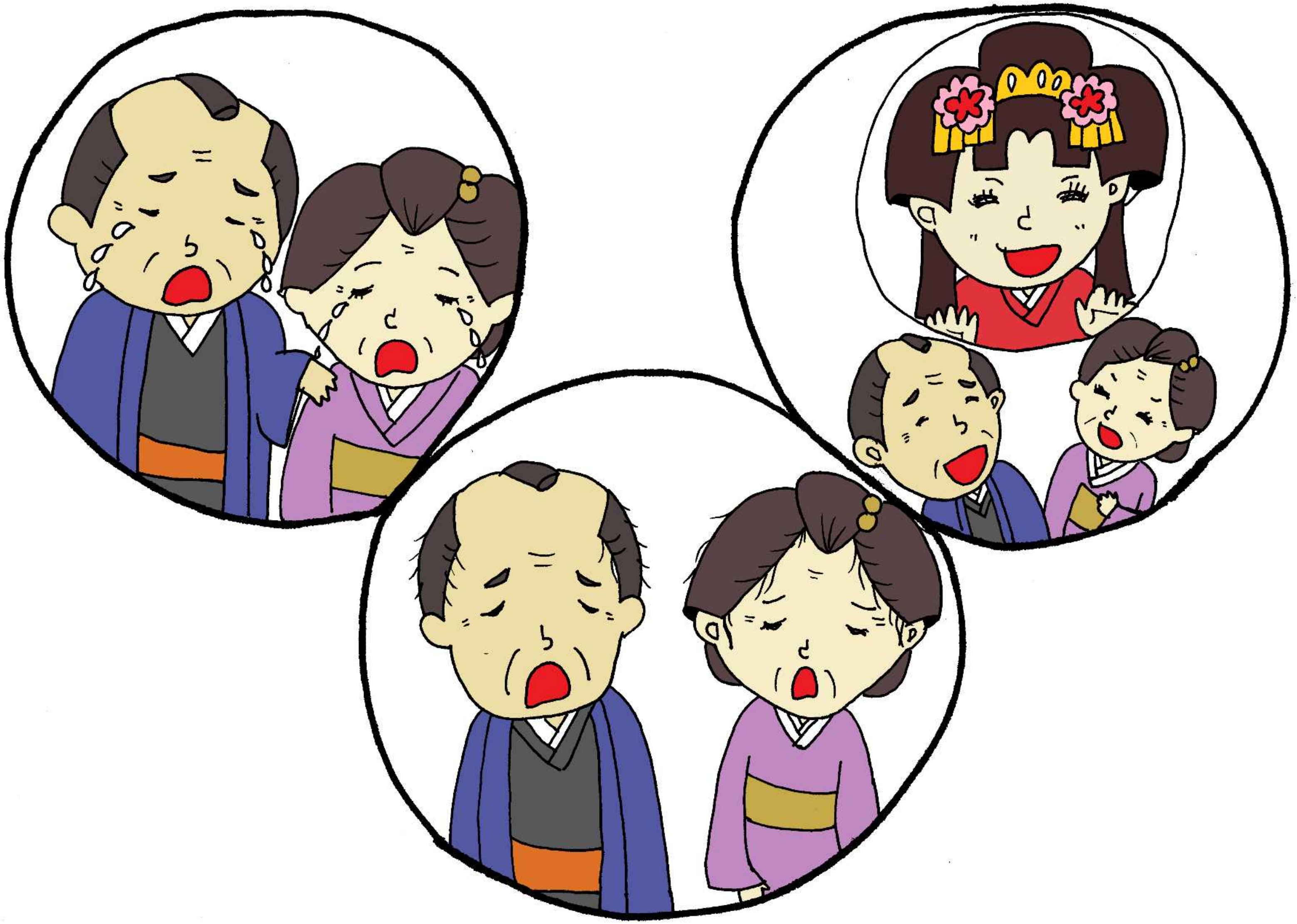
次の年の五月の節句に、キヌ子『お父様、お願いあれし、私一度、せんだん栗毛ば埋めだ山桜のどごさ花見に行きてえはで行がせでけ』てしたど。
左衛門も、ふさぎ込んでらキヌ子も花見さでも行げば気も晴れるど思て、酒肴したぐして人ば何人もつけで、山さ花見にやったど。



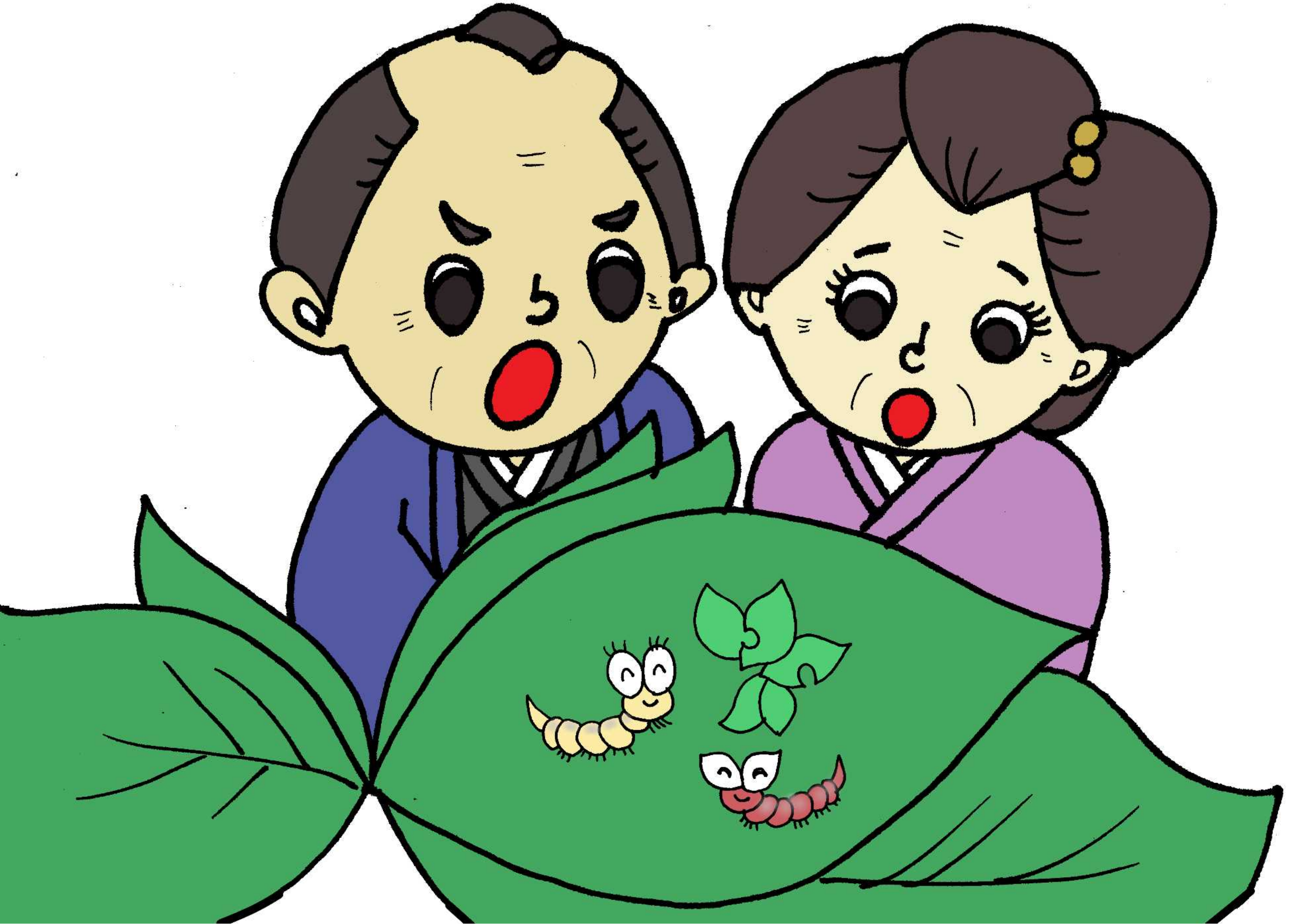
山奥まで来たきゃ使用人が『キヌ子様、ここぁせんだん栗毛ば埋めだどごでごえし』て言たど。
キヌ子はそごさ塔婆（とうば）ば立でで、灯明ばつけで、線香焚いでおがんでがら、みんなして重箱開いで、せんだん栗毛の供養の酒盛りばしたど。
やがて、酒盛りも終わって後片付けしてら時、キヌ子は一人、大ったた桜の木さ立って『せんだーん、せんだーん、もう一度、一目でも会いてじゃよー』って叫んだど。

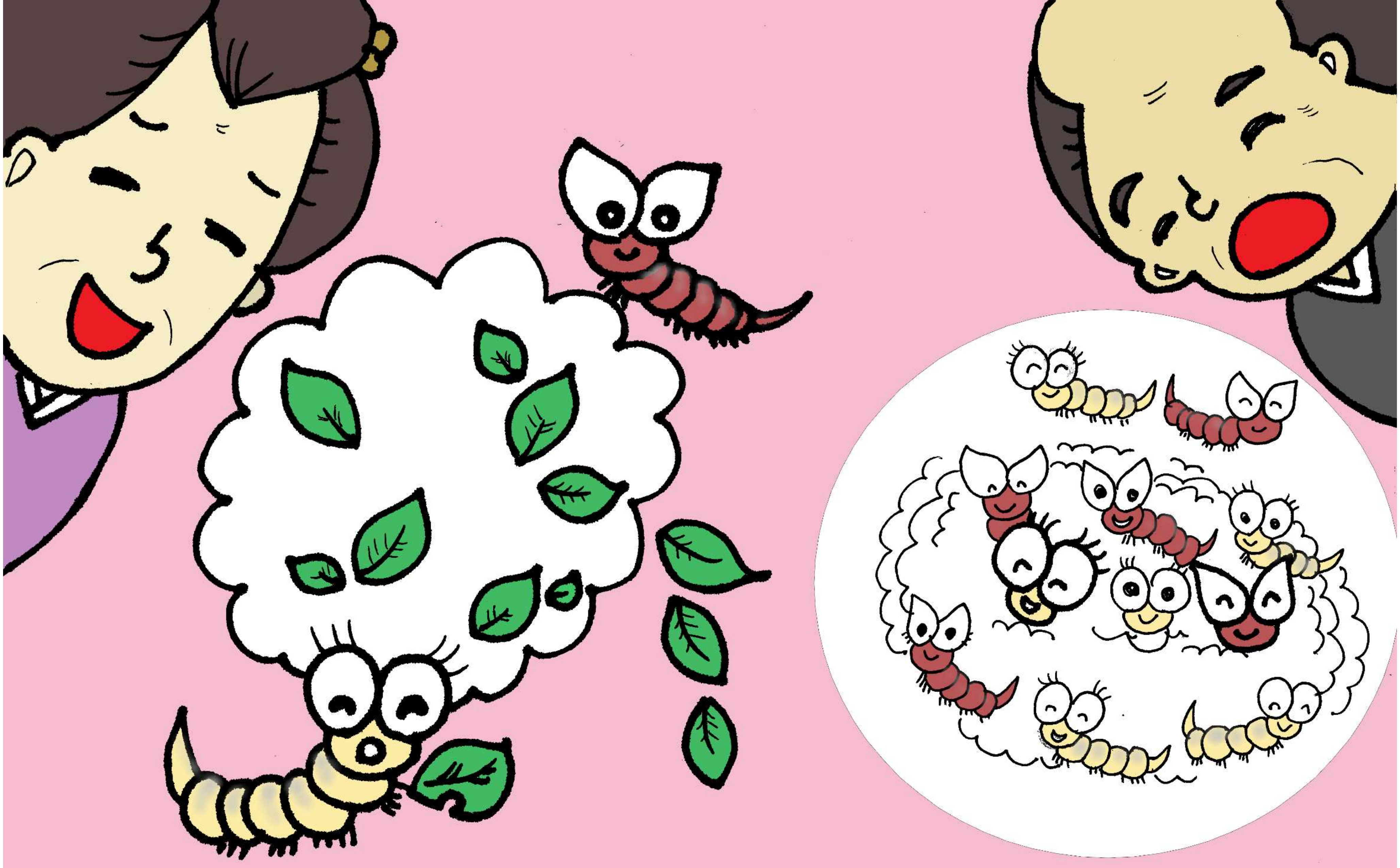
したきゃ、ろぉー、急に天気ぁ変わって、雨風（あめがじゃ）乱風になったど思ったきゃ、雷ぁビガビガーッ、ゴロゴロど鳴ってきた。そしてそれがおさまった時、空の一角さ、五色の雲ぁ現れできて、その雲ぁ、キヌ子の体ばフワッと包んで、そのまんま抱いで天さ昇って行ったど。
使用人達ぁあわでで手ばのべだり、竿ばのべだりしたばて、どうする事もでぎねぇであったどし。あっという間のでぎ事であた。

戻ってきた人達がら、その話ば聞いた左衛門どかっちゃ、すっかど力落としてせ、毎日泣いでくらしたど。
仕事も何も手さつかねで哀しんでばりいだもんだどごで、だんだん銭コも何も入ってくる事ぁねぐなって、とうとう竃（かまど）返（け）してまったど。
二年も過ぎる頃『これぁ今の世の事ではねぇびょん。前世がら決められであった事だびょん』ど思って、やっとあぎらめる事にしたど。



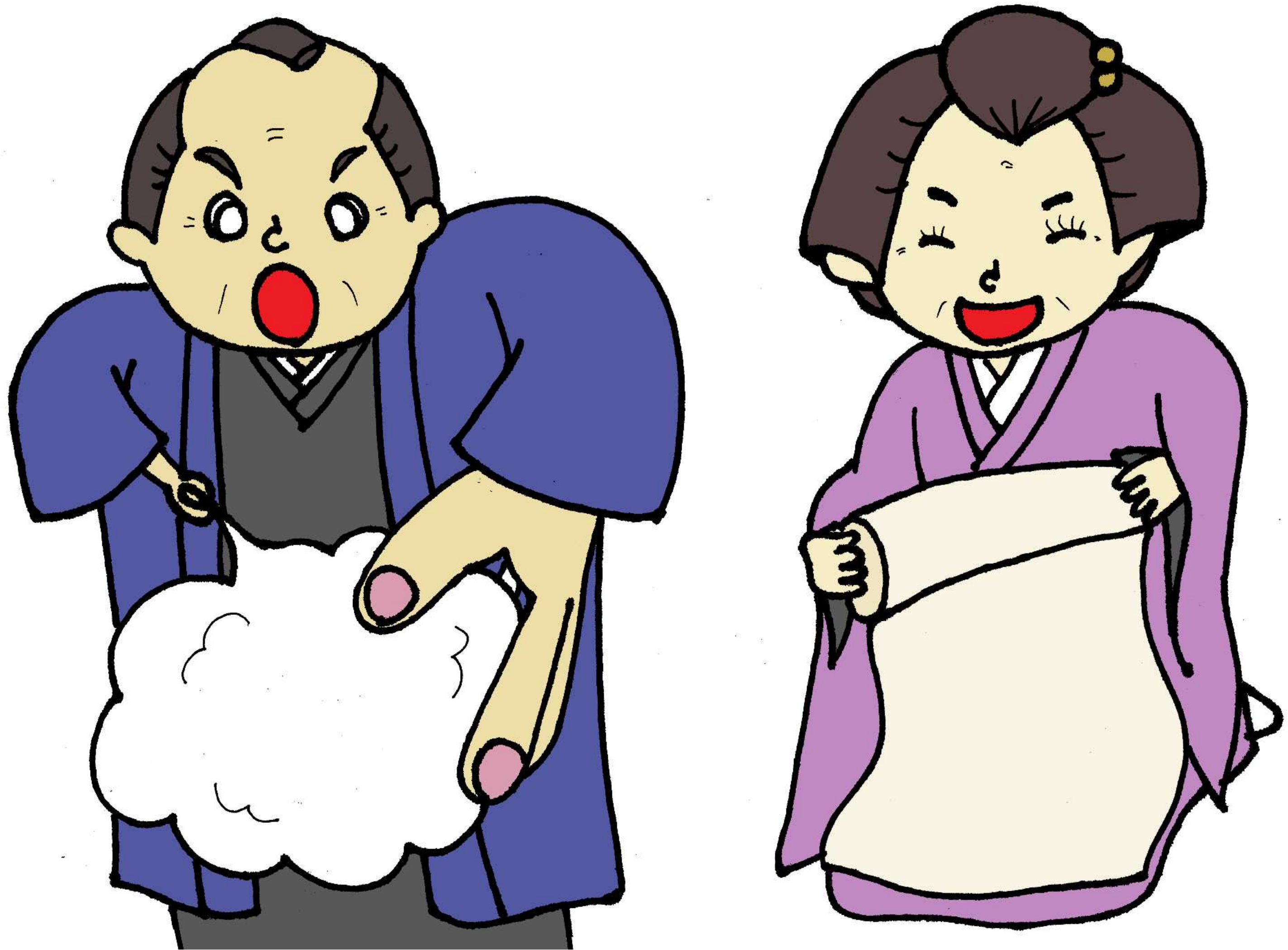
ある日、夫婦して庭ば歩いてらきゃ、草茫々（ぼうぼう）どなってまた坪庭（つぼ）の桑の木さ、赤ぇ虫コど白い虫コいるのばみつけだど。
赤ぇ虫コのつらコ見だきゃ、せんだん栗毛さ似であったど。白い虫コ見だきゃキヌ子だけんてあた。
不思議だ事もあるもんんだど思いながら、桑の枝コ折ってのべでやたきゃ、赤い虫コ、白い虫コ葉っぱばシャリシャリシャリて喰ったど。





それがら毎日、左衛門どかっちゃ、桑の葉ば集めで来て、きざんで食へだど。
そしたら、その虫コ達ぁ、そればどんどど食って大っきぐなって、巣作ったど。
その巣がらまた、キヌ子どせんだんさ似だ顔コの虫コぁ次々ど出できたど。
左衛門どかっちゃ、それさもせっせど桑の葉とって来て食へで忙しぐなったど。

その巣ずものぁ、フワフワず白い莢（さや）コでせ、その莢コがら外側のフワフワ引っ張って
みれば、その糸コぁ、ほれぇ、なもかもいい糸コで、あぱ、その糸コで織物織ってみだきゃ、
んにゃんにゃ、スベスベてっした、とってもいい肌ざわりであたど。
左衛門とあぱ、虫コば増やして、その莢コがら糸コとって、その糸コば染めで織物にしたきゃ、
近所がら評判ば聞いで、売ってけて来る人も居だど。
そごで左衛門は、その布さ「絹」ってする名前コつけで売り出したきゃ、われもわれもど求め
に来る人達ぁ居で、飛ぶように売れだんだど。



二人ぁ毎日汗流してせっせど働いだどごで、おいおい銭コも入ってくるようになって、元の使用人達も一人二人て戻って来てよ、一年も経ったきゃ、また元の暮らしさ戻った。
せんだん栗毛とキヌ子ぁ、親達ごと悲しませだ、せめてものお詫びにど思って、これば親達さ授けたんだびょん。
そうしてるうぢに、この夫婦さは、また赤子（おぼこ）出来でせ、それがらずもの、親子三人あずましぐくらせるようになったんだど。

とっちばれ